

# 港湾都市横浜の空間形成史に関する研究

石渡, 雄士 / ISHIWATA, Yushi

---

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

112

(発行年 / Year)

2018-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第232号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2018-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014638>

博士学位論文  
論文内容の要旨および審査結果の要旨

|         |                                           |
|---------|-------------------------------------------|
| 氏名      | 石渡 雄士                                     |
| 学位の種類   | 博士（工学）                                    |
| 学位記番号   | 第 671 号                                   |
| 学位授与の日付 | 2018 年 3 月 24 日                           |
| 学位授与の要件 | 本学学位規則第 5 条第 1 項(2)該当者(乙)                 |
| 論文審査委員  | 主査 教授 陣内 秀信<br>副査 教授 高見 公雄<br>副査 教授 高村 雅彦 |

港湾都市横浜の空間形成史に関する研究

1. 論文内容の要旨

本論文は、港湾都市として発展した横浜を対象に、その空間形成について2つの視点から解き明かそうとするものである。ひとつ目の視点は、個別の研究対象として扱われていた港湾施設と後背地の両者を結びつけてその形成過程を示すことである。二つ目の視点は、これまで詳細に論じられることのなかった港湾施設そのものに焦点を当て、開港から近代的港湾施設が完成する昭和初期までの変遷過程を解説することである。

本論文の本編は、4章で構成される。本編に先立つ序章では、本研究の目的、背景と問題の所在、既往研究と本論文の位置づけ、論文の構成について述べた。

第1章では、横浜村（後の関内地区）と神奈川を対象に、海路と陸路に着目して横浜全体の地域構造を明らかにすることを目的としている。

第1節では、横浜村と神奈川の位置関係や歴史的背景について述べた。

第2節では分析方法として、地図上に地形や古道、寺社、城跡などの要素をプロットすることで地域構造を解説したことを述べた。

第3節では、海路に着目して横浜の地域構造を検証した。海路では神奈川湊が航路の要衝に当たり、後背地とのネットワークにおいても利便性の高い場所にあったことを指摘した。

第4節では、陸路に着目して横浜の地域構造を解説した。近世の主要街道との関係から神奈川宿、横浜村（後の関内）について論じた。また古道のほかに中世の城跡をプロットすることで、地域の拠点が変遷したことを指摘した。

第5節では、分析の対象地を神奈川に絞り、寺社の創建年代やその移転、城跡を地図上にプロットすることで地域構造を検証した。その結果、中世までの神奈川の中心地と近世に発展する神奈川宿の場所が異なることを指摘した。そして近世に整備された神奈川宿の地域形成を寺社の移転から論じた。

以上の考察から、開港までは神奈川が横浜の中心地であったことを指摘した。その一方で後の関内となる横浜村は、海路と陸路において周辺地域から隔離された場所であったことを示した。また横浜村において近世以前と近世以後の地域構造の連続性について考察をおこなった。

第2章では、港湾施設の発展と共に、その後背地となる関内においても土地の用途が変化し、施設利用の変遷が見られる過程を明らかにするため、その象徴的な事例として横浜生糸検査所敷地を取りあげて考察を行った。

第1節では、横浜生糸検査所跡地を事例として取り上げた理由や、関内における対象地の位置づけを論じた。

第2節では、施設利用の変遷から対象地が4つの時期に分けられることを指摘した。そして本章の考察を進める上でベース図となる敷地割を示した地図の作成方法や分析で扱った史料について論じた。

第3節では、対象地に外国公館が立ち並ぶ第1期について論じた。風光明媚な立地を活かし、良好な住環境が求められる外国公館の場所として対象地が利用されたことを指摘した。また他の外国人居留地と外国公館の地坪数を比較することで、対象地が住環境に恵まれていたことを明らかにした。

第4節では、外国公館跡地に官庁施設が置かれる第2期について論じた。また新聞記事の分析から、東海鎮守府では軍事目的以外にも利用されたことを明らかにした。

第5節では、御用邸が移転する第3期について論じた。御用邸の利用目的について新聞記事から分析を行った。その結果、利用目的の一部が第2期の東海鎮守府から引き継がれていたことを明らかにした。そして新港埠頭の完成によって対象地が物流の拠点として重要となったことから、敷地が統合されて生糸検査所となる過程を論じた。

以上から、港湾施設とその後背地が関係性を持ちながら発展した過程を示すことで、個別に論じられることの多かった横浜の都市史研究に新たな視点を示すことができた。

第3章では、関内の税関構内を対象に運搬形態の変遷を絵図や図面史料から読み取ることで、港湾施設が4つの段階を経て発展したことを明らかにした。対象となる時代は、開港から本格的な近代的港湾施設として新港埠頭が完成する大正初期までである。

第1節では、我が国における港湾のあり方が近世から近代にかけて大きく変化したことを指摘し、横浜港を含む商港の近代的港湾施設の特徴について論じている。

第2節では、横浜港の港湾施設の変遷を解明する上で4つの時期に分けて検証したことを指摘し、分析に用いた史料について述べた。

第3節では、沖荷役が行われていた第1期の港湾施設（波止場）について論じた。接岸設備では東西の波止場を中心に、その規模や雁木の存在を明らかにした。また陸上設備は建設されておらず、波止場周辺は更地の状態であったことを地図や絵図史料で明らかにした。

第4節では、第2期の港湾施設（波止場）について論じた。陸上設備では上屋や倉庫、鉄軌、転車台、起重機を対象に考察を行った。上屋や倉庫ではその建設年代や位置、規模などを文献や地図史料から明らかにした。残りの鉄軌と転車台、起重機については荷揚げの機械化が進められたことを指摘した。

第5節では、第3期の港湾施設（波止場と鉄栈橋）について論じた。横浜港において初めて岸壁荷役用の接岸設備となる鉄栈橋について3つの部分（鉄橋、栈橋前部、栈橋後部）に分けて各部分の用途を指摘した。鉄栈橋上の鉄軌が第2期の港湾施設（波止場）へと連結されていることから、この両者をつなぎ合わせて荷役が行われていたことを明らかにした。また鉄橋の存在から、鉄栈橋は岸壁荷役のみでなく、沖荷役で利用される舢舨の航行に配慮された設計であったことを指摘した。

第6節では、第4期の港湾施設（新港埠頭）について論じている。岸壁荷役として利用された岸壁と沖荷役として利用された物揚場について、その位置や寸法、水深について明らかにした。陸上設備は海側から岸壁→起重機用鉄道・列車用鉄道→上屋・倉庫→列車用鉄道の構成で、岸壁荷役が行われていたことを指摘した。その結果、舢舨輸送に頼らずに鉄道によって直接に内陸へと運搬できる点が第3期と異なる点であると指摘した。

以上から、港湾施設の変遷について接岸施設と陸上施設の視点で解説することにより、これまで論じられることのなかった港湾施設間の関係性や空間構成の違いを明らかにした点に本章の独自性がある。

第4章では、関東大震災前後における税関構内の官設上屋と倉庫の空間構成について論じた。

第1節では、税関や港湾施設の概要について論じ、上屋と倉庫が港湾の景観を構成する上で重要な要素であることを指摘した。

第2節では、分析で扱った史料の概要と研究方法について論じた。

第3節では、当時の港湾施設において上屋と倉庫がどのように位置づけられ、またどのように使用されていたのかを史料を用いて検証した結果、関東大震災前後の時期にそれまで混在していた上屋と倉庫の使用目的が明確に区別され、両者とも岸壁荷役用の港湾設備として一般的に使用されるようになったことを明らかにした。そして収集した史料を元に、分析対象の上屋と倉庫についての基本情報（構造や階数、梁間と桁行の寸法）を整理した。次に上屋と倉庫における梁間と桁行の寸法について、当時の主要港と比較しながら横浜港の特徴を論じた。

第4節では、上屋と倉庫の貨物空間について論じた。貨物空間では、用途の違いから上屋と倉庫では異なる空間構成となっていることを指摘した。また、関東大震災前後で屋根の架構形式によって柱の配置に違いがあることを明らかにした。

第5節では、上屋の旅客空間について論じた。関東大震災後の上屋では、旅客空間の動線や待合室の空間構成を検証することで、より快適性を重視した設計であったことを指摘した。また、天井の形態などから旅客空間と貨物空間に違いがあることを指摘した。最後に旅客空間は送迎の用途だけではなく、酒場や食堂の設置により食を楽しむための空間としても利用されたことを指摘した。以上からこれまで詳細に解明されることのなかった上屋や倉庫に関して、同時代の主要港の建物と比較し、さらに用途別にその空間構成を解明した点に本章の独自性があり、当時の港湾空間の一端を示すことができた。

結章では、本編から得られた知見を整理した。本論文の目的である2つの視点から得られた研究成果により、膨大な研究成果の蓄積がある横浜研究に港湾の側から都市を見る新たな視座を提示することができたと考える。

## 2. 審査結果の要旨

本論文は、近代の港町として知られる横浜を港湾都市として捉え直し、その形成過程を港湾と後背地の関係性に着目して歴史的に考察したものである。また従来、詳細に論じられることのなかった港湾施設そのものに焦点を当て、開港から昭和初期までの変遷過程を明らかにした。都市史研究と土木史研究を繋ぐ新たな視座から考察を行い、次のような優れた成果を得た。

1 横浜の開港以前の原風景を描き、後の港湾都市の形成との関係を考察した。まず、海路と陸路から地域構造を検証し、近世以前には神奈川に地域を中心があったこと、さらに、寺社の創建年代や移転、中世の城跡の分布から、同じ神奈川でも、中世と近世では異なるエリアで地域形成がなされたことを明らかにした。一方、横浜村から発展し港湾都市の中心となった関内の空間構造に受け継がれた前近代の土地に根ざす要素についても考察を行った。

2 港湾都市の発展段階に応じ、関内の海辺の土地の役割や意味が変化し、そこに立地する施設の在り方に変遷が見られたことを示した。その象徴的事例として横浜生糸検査所の敷地を取り上げ、一筆ごとの施設利用の変化の解析を通して、海を望む景勝地だったこの地が、港湾都市の拡大でその性格を失い、最終的には新港埠頭の背後という立地条件を

活かし物流・貿易拠点としての生糸検査所になるまでの変遷を明らかにした。

3. 関内の税関構内において開港から大正初期までを対象に、運搬形態の変遷を絵図や図面史料から読み取ることで、港湾施設が4つの段階を経て発展したことを明らかにした。そのなかで岸壁荷役の港湾施設として一般的に説明されてきた鉄棧橋や新港埠頭においても、依然沖荷役が重要な役割をもち続けた事実を指摘した。

4. 関東大震災前後の時期に、それまで混在していた上屋と倉庫の使用目的が明確に区別され、両者とも岸壁荷役用の港湾設備として一般的に使用されるようになったことを文献史料から明らかにした。次に税関構内の官設上屋と倉庫を対象に、貨物空間と旅客空間の空間的特徴を分析し、震災復興時に建設された上屋と倉庫では工法や平面計画に改良が認められること、旅客空間では快適性をより高める空間へと変容したことを示した。

日本を代表する近代の港町・横浜の港湾空間形成史を論じた本論文は、都市史研究や水都研究の分野での大きな学術的意義をもつと同時に、膨大な蓄積のある横浜研究に港湾の側から都市を見る視座を提示した点で新機軸を切り開くものと言える。よって、本審査小委員会は全会一致をもって提出論文が博士（工学）の学位に値するという結論に達した。